

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
<p>本校の教育テーマ「国際教育」「環境教育」「表現活動」を相互に関連づけて推進し、グローバルな視野を身に付け、主体的に生きる力を育み、世界に発信できる人材を育成する</p>	<p>(1)北稜ならではの国際教育                      ・英語科の授業だけでなく、他教科の授業、ホームルーム活動、部活動、生徒会・委員会活動等多方面で、本校普通科の中心的な柱として、国際教育を展開することができた。今後も全校体制での国際教育の充実を目指していきたい。                      ・国際交流の機会を取り込んだ英語科の授業が展開できた。また、「話すこと」に焦点を当てた指導実践を積めた。                      ・オーストラリア研修旅行では、生徒自身が英語を使って果敢に挑戦することができた。また、今後継続的に活用できる行程やプログラムを作れたことが最も大きな成果である。                      ・訪日高校の受入や米国留学生の受入等、日本にいながら日常的に異文化を経験できる環境が整った。                      ・「北稜高校3つの留学」を拡充し、「5つの留学」とした。英語力不問、挑戦する人を応援する留学システムとして、今後も継続していきたい。また、帰国した生徒の活躍の場を設け、留学を文化としていくことが今後の課題である。</p> <p>(2)まなびの森、北稜                      ・教務部が中心となって、生徒の主体性に力点を置いた授業研究を2年間、粘り強く実施してきたことにより、授業を考える観点が共有できてきた。                      ・新学習指導要領対応、観点別評価が完成年度となり、成果と課題が明確になった。次年度は年度当初から、教務部を中心として、課題を解決していきたい。                      ・探究チームを中心に、「北稜CANVAS」のカリキュラム改善に取り組めた。自分ごとの迫力ある探究の実現に向けて、令和7年度は校内体制も改めて取り組んでいきたい。                      ・初年次サポートについては模索が続いているが、さまざまな生徒課題から、最適な支援を早期に実現していくことが切り札になることは見えてきた。令和7年度は校内体制も整えて臨みたい。                      ・「まなびのForest Week」の取組の中で、読書のきっかけ作りができた。今後も粘り強く、読書を文化として根付かせていきたい。                      ・環境教育については、特に探究と環境委員会で充実した取組が展開できた。次年度は特に環境委員会の活動の校内体制を整え、生徒にとって環境委員会が大きな活躍の場となることを支援したい。                      ・地域課題解決については、生徒会を中心に組織的に動くことができた。生徒会そのものの充実に伴い、活動も活性化している。今後も支援を強化していきたい。                      ・北稜ならではの進路指導、「チーム」「解法」「習慣」をコンセプトとした「7組受験チーム」では、生徒とともに試行錯誤を繰り返しながら、充実した取組を実施できた。7組が本校の受験文化となることを目指して、今後も試行錯誤していきたい。                      ・学校行事では、特に北稜祭の地域開放で大きな成果があった。次年度も、生徒会を中心に、生徒の主体性発揮の場として充実させていきたい。</p> <p>(3)多様性の森、北稜                      ・生徒が主体性を発揮し、挑戦する場として、部活動、生徒会活動、委員会活動、7組受験チーム等それぞれが取組を充実させることができた。今後も、この流れを大切にしつつ、取組の充実を図っていく。                      ・生徒指導部、保健部を合わせて生徒支援部とすることにより、発達支持的生徒指導の実現に向けて動き出すことができた。特別支援の観点をもった教育活動の見直しについて、校内研修等を行うことにより、前進させることができた。今後は、校内組織の見直しをおとして、より具体的に展開させていきたい。                      ・生徒会が中心となり、地域のプラットフォームを目指した取組を進めることができた。今後も、生徒が地域とつながる手段の一つとして展開していきたい。                      ・安定した人権教育を組織的に展開できた。今後は、特に人権学習プログラムを再編することで、多様性に重きを置いた人権教育を実現していく。</p>	<p><b>北稜ならではの教育活動の中で「主体的に生きる人」が育つ学校</b></p> <p><b>(1)「北稜ならではの国際教育」</b></p> <p><b>「京都岩倉に国際の北稜あり」と認知される学校へ。</b></p> <p>○「岩倉から世界に果敢に挑戦する力」を育てる、普通科全員を対象とした国際教育を全教科・分掌で展開                      ○生徒の学ぶ意欲の喚起ならびに学びの手法獲得に重きをおく、「使える英語」が身につく英語科教科指導の確立                      ○普通科全員で取り組むオーストラリア研修旅行を軸とした国際教育の充実                      ○北稜ならではの留学支援の充実                      ○国内にいながら生きた国際交流を可能とする、留学生・訪日高校生との交流の充実</p> <p><b>(2)「まなびの森、北稜」</b></p> <p><b>「学びの喜び」を体験し、「自立した学習者」へと育つ学校へ。</b></p> <p>○タイムマネジメント力の育成に向けた取組を全分掌・全教科での展開                      ○探究的な学びの全分掌・全教科での展開                      ○「チーム」「解法」「習慣」をキーワードとした「7組受験チーム」の充実                      ○地域をフィールドとして獲得した課題解決力をグローバルな問題解決につなげる、「地域の課題解決力、京都No.1校」を目指した教育活動の具体的展開                      ○「生徒の頭の活性化」にこだわった、主体的・対話的で深い学びについての授業研究                      ○新学習指導要領対応、観点別評価、学びのICT化等の教育課題に対して、「授業力向上」を中心においた組織的な取組の推進                      ○生徒が主体性を発揮する挑戦の場としての学校行事、特に「北稜祭」の充実</p> <p><b>(3)「多様性の森、北稜」</b></p> <p><b>多様性の中で主体的に、自立して生きる、「品格ある北稜生」が育つ学校へ。</b></p> <p>○部活動、生徒会活動、委員会活動、7組受験チームの活動等、生徒が主体性を発揮し、挑戦する場としての学校機能の充実                      ○「生徒指導提要」改訂の趣旨にのっとった発達支持的生徒指導の組織的展開                      ○早期に最適な支援を行う校内組織の確立                      ○北稜が岩倉地域のプラットフォームとなり、生徒の世界を広げることを目指した地域連携の充実                      ○多様性に重きを置いた人権学習の充実</p>

令和7年度 府立北稜高等学校 学校経営計画(スクールマネジメントプラン) (実施段階)

評価領域 (分掌領域)	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			項目	総合	
国語科	多様な生徒が主体的に学ぶための授業力の向上に取り組みながら、「探究的な学び」に必要な力を育成する。	生徒の多様性に対応するために、ICT特にiPadのさらなる利活用を進め、古典や評論文、小説、随筆などの多くの文章を用いて主体的に課題を設定させたり、様々な意見を出させ合ったりすることで、対話的に学ぶ力や批判的思考力、問題解決能力や他者と協力して取り組む力を身につけさせる。	B	B	ロイロノート等のアプリケーションを活用しながらiPadを授業に取り入れることで、生徒一人ひとりが課題を主体的に設定し、古典や評論文、小説、随筆など多様な文章をもとに意見を形成する活動をさせることができた。ペアやグループでの意見交換を通して、対話的に学ぶ姿勢や他者と協力する力が確実に育成され、批判的思考力や問題解決に向かう力にも一定の伸びが見られた。今後は、さらにICTの特性を生かした個別最適な学びと協働的な学びの両立を図り、より深い学習につながるよう改善を進めていく必要がある。
地歴公民科	地域を起点としてグローバルな視野を養う学びを、科目の特性を活かして展開する。	グローバルな地理的・歴史的認識の下、同時代の世界、周辺諸国の動向や関わりに注目した授業を展開する。また、地域社会との関わりをなかで、主権者意識を育み、SDGsの目標達成をめざす教育指導を実践する。	B	B	各科目において、主権者意識を育む取り組みや、地域の防災やSDGsに関わる地球規模の課題について生徒たちが考え、表現するための授業を展開した。「地域を起点として」については、授業の中で具体的に位置付けが難しい場面もあった。その点を踏まえ、次年度は生徒が自らの生活圏に目を向け、社会的事象を自分事として捉える姿勢が育めるよう科内で協力し教材開発に努めたい。
数学科	主体的・対話的な学びが“見える化”され、互いに学び合える授業を目指し、授業力の向上を図る。	・教員からの一方向の授業でなく、数学的な考え方やプロセスを「言語化」したり「図・表・式」で表したりする活動を設ける。 ・生徒の「わかる」だけでなく「わかったことをどう伝えるか」に焦点を当て、論理的に伝える力・聞く力を育む。	B	B	(成果) ・ペアワークを通じて思考過程の共有が促進され、生徒同士で回答の違いや考え方を比較しながら学ぶ姿が見られた。アウトプットの場面が増え、「説明する」「聞く」活動が定着しつつあり、学びの可視化が進んだ。 (課題) ・アウトプットの機会は増えたが、正解かどうかの確認だけで終わる場面があり、考え方の比較・改善まで深めるための次の指導が不足していた。(例:誤答の原因分析、他者の考え方との比較など)
	短期的な記憶に頼る学習ではなく、学力の定着を図る。	・知識を一過性で終わらせるのではなく、繰り返し活用(週課題や復習小テスト)することや、考え方を言語化・図式化する活動、振り返り活動を通して、“使える学力”の定着を目指す。 ・「7組受験チーム」に参加している生徒を中心として、チーム・解法・習慣をキーワードに学力の定着を図る。また、互いに切磋琢磨できる環境を設定し、入試に対応できる学力を育む。	B	B	(成果) ・模試に向けた「わかりやすい授業」の実施に加え、模試直前対策プリントを活用することで、上位層の思考過程の整理・確認が進み、成績向上につながった。 ・各定期考査後の振り返り活動により、「テスト勉強の方法」「次回に向けた行動改善」を生徒自身が言語化できた。 (課題) ・学習内容の定着に時間を要する生徒に対して丁寧に指導を積み重ねたが、実際に使える理解の段階までの到達が難しく、全体の底上げにまでは結びつかなかった。
理科	基礎学力の定着を図るとともに、自然現象への興味・関心を持たせ、科学的思考力を育む。環境教育も推進する。	身近な自然現象や環境問題に関わる題材を各科目の視点で取り入れる。演示実験や模型、視聴覚教材を活用し、学習内容への興味・関心を持たせる。実習においても、ICT機器も活用しながら協働的な学びを取り入れる。	B	B	視聴覚教材を示すなど、生徒の興味・関心をひく工夫をした。実習では学習支援アプリを応用し、実験結果を生徒間で共有した。考察を深められる機会をさらに多く設けることで科学的な思考力を養う必要がある。小学校や外部機関と連携をもち、環境教育を推進することができた。科学的な要素を今後さらに取り入れていく。
		明確で細かな指示を心がけ、生徒がスムーズに学習に取り組めるようにする。学習習慣の確立のため、課題プリントや小テストを適宜取り入れる。また、定期考査を活用し、生徒が自身の学習課題を見だし、改善できるよう手立てを講じる。	B	B	授業計画や評価基準を生徒に示し、生徒が見通しをもって学習に取り組めるよう意識した。ペア・グループワークでは、活動の目的や手順を理解できるよう丁寧な説明を心がけた。定期的な小テストや日々の問題演習により学力の定着を図った。課題の提出を含め、個別最適な対応を今後も取り入れていく。

評価領域 (分掌領域)	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			項目	総合	
保健体育科	健康・体づくりや心の健康、食生活、休養・睡眠など、総合的な生活習慣の改善について学び、実践につなげる。多様な運動を経験させ、個々の運動能力を高めつつ、運動への興味・関心・意欲を喚起する。	保健の授業や体育理論の授業の中で、アクティブラーニングを導入し、ライフスキル教育の充実を図る。	B	B	生徒が自ら課題を見だし、グループディスカッションや発表を通して解決策を検討する場面が増え、主体的な学びの促進につながった。一方、授業時間内で十分な協議・振り返りの時間を確保することが難しく、また生徒間で意欲や参加の度合いに差が生じやすい点が課題として残った。 ICT(動画・アプリ等)の活用により、生徒が自身の動きを視覚的に捉えて改善点を明確化しやすくなり、技能向上につながった。一方で、動きを客観視することが難しい生徒への支援や、個に応じたフィードバックが十分に行き届かない場面があった。
		ICT(動画・アプリ)を活用した運動技能の可視化・フィードバックをおこない、個人技能の向上を図る。	B		
芸術科	芸術の幅広い活動を通して、各科目における見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の芸術や芸術文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指す。	生徒のレポートやアンケートを用いて、目標の設定と振り返りをさせることにより、芸術における諸能力が高まったかどうかを評価させる。	B	B	毎時間または題材ごとの振り返りを行い、生徒は自身の成長を評価した。 大型スクリーンやタブレット端末を活用して授業を展開した。生活や社会の中の芸術や芸術文化と関わる題材に取り組んだ。
		主体的・対話的で深い学びの実現に向け、ICTやアクティブラーニングを活用した授業を展開する。	B		
英語科	新学習指導要領に基づいた指導と評価方法の構築をさらに進める。	指導方法や評価方法について、教員間での意見交換や情報交換を行い、新学習指導要領に基づく指導と評価の実践をさらに進める。	B	B	各教員が4技能を統合した活動を日々の授業の中で取り入れ、パフォーマンステストを定期的に行うことで、英語運用能力を評価した。また、引き続き「教科書で学ぶ」を実践したが、その指導や評価については、さらなる教員間での意見交換や情報交換が必要である。 オーストラリア海外研修旅行、諸外国からの学校訪問、海外とのオンライン交流など、学校行事や授業を通して、全生徒に多種多様な国際交流の機会を提供し、学校運営の柱の1つ「国際教育」に中心的な役割を果たした。ただ、生徒個々の発話の機会の確保や方法について、また、「定型の表現」を特定の場面で使うことはできるが、「即興性」の点における語彙力や表現力の不足について、継続した検討や指導が必要である。
	「国際教育」の中心的な教科として、生徒の学習意欲や英語運用能力の向上を目指す。	生徒全員を対象とした国際交流を充実させ学習意欲の向上を図るとともに、授業だけではなく外部試験など様々な学習機会を通して、英語運用能力の向上を図る。	A		
家庭科	「自立と共生」を軸に家庭生活で必要な知識や技術を身につけるとともに、暮らしと社会を結びつけて考え、新しい価値観や行動を生み出すことを目指す。	必修の家庭基礎においては基本的な知識を身につけ、その上でパフォーマンス課題をとりいれる。	B	B	新しいパフォーマンス課題を取り入れ、昨年度興味関心の少なかった分野も少しは変わってきた感触があった。しかし、基本的な知識の定着にはまだ課題がある。 実習中心の授業ではあるが、実習中に外部の人とふれあう中で社会に目を向けることが出来た。
		3年選択授業においては、実習だけでなく暮らしと社会を結びつけて考えられるような教材を考え実践する。	B		
情報科	操作技術の習得にとどまらず、情報社会において正確で信頼性のある情報を選び取り、自らの目的に応じて活用・発信できることを目標とする。	・文書処理、表計算、プレゼンテーションなどの実習活動を通じてPCの基本てきな操作と情報活用の実践力を身につける。 ・情報モラルや情報セキュリティを学び、それを北陵CANVASでの探究活動や他教科(国語・社会など)の「発信活動」や「調べ学習」に活かせるように指導をする。	B	B	・大学入学共通テストや将来の社会生活に役立つよう実習内容を改訂した。今後、生徒自身が課題解決に向けて探究する時間を確保していきたい。 ・情報モラルや情報セキュリティに関する基本的な理解とともに社会で起こっている具体的な事例を紹介できた。
総合的な探究の時間	生徒起点の「問い」から始まる探究学習を重視し、すべての学びの土台となる「主体性」や「協働性」、「創造性」を養う。また、自身の探究の広がりと社会との繋がりを意識することで実際に社会に参画しようとする態度を育成する。	①生徒目らが「やりたい」「学びたい」と主体的に取り組めるように、生徒の疑問や興味を引き出すワークや対話を行う。 ②探究のサイクルである「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」→…を行うなかで、自身の興味・関心(Will)と必要性・課題(Need)を結びつけ、学びが実社会に生きる感覚を経験させる。 ③上記の学びを重ねた生徒が、実践発表会を通じてお互いに刺激し合う中で、教師を超えた多様で創造的なアイデアやプロジェクトが出てくることを目指す。 ④生徒だけでなく教員全体で探究の価値観や伴走の手法を共有するために職員研修などを通じて情報を発信する。	B	B	授業内でおこなったアンケートから、自身の興味・関心を起点に探究に向かおうとする生徒が一定数広がった点は成果である。一方で、生徒間の主体性や探究の深まりには差があり、問いの設定段階において十分に「自分ごと化」できない生徒がいることも明らかになった。教員側については、職員研修や伴走者間の相談会を通じて、探究の価値観や伴走の在り方について共通理解がかなり進んだ。一方で、まだ教員間での捉え方の差も依然として見られ、年間を通じた体系的な振り返りや実践知の蓄積・共有の仕組みづくりが課題である。

令和7年度 府立北稜高等学校 学校経営計画(スクールマネジメントプラン) (実施段階)

評価領域 (分掌領域)	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			項目	総合	
教務部	主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、各教科の授業力向上を牽引する。	生徒・教員共にICT機器の整備を進めることで、協働的に学ぶ環境を整えとともに、ICT機器の活用を促進する。	A	A	多くの先生がiPad使用の技術が上がり、授業のICT化が進んできた。生徒が授業内で活用する場面も増え、ICT活用が日常に浸透している。遠隔授業の実施が進んでおり、多くの先生が遠隔授業を経験した。大きなトラブルなく対象生徒の卒業まで遠隔授業を実施することができた。
		秋の研究授業週間を軸に授業改革を進めると共に、観点別評価の方法を振り返り、授業と評価の一体化を目指す。	B		各教科で、観点別評価のノウハウが蓄積されてきた。日常の活動の中で評価を行うことへの意識付けも進んでいる。
教育推進部	国際教育、まなびの森、多様性の森の活動を面白そう、楽しそうという切り口で切り取り、わかりやすく中学生や保護者等に伝える。□	各分掌や部局活動と連携を密にして、取材の回数を増やし、学校HPやSNSの発信の頻度を高める。□	A	A	関係各所と連携を密にして、HPやSNSの発信頻度を高めることができた。来年度は質も向上させて視聴者に響く投稿をしていきたい。
		中学校や塾との連携を密にしたり、ポスターを店や施設に貼ってもらったりして、北稜の教育活動を知ってもらう機会を増やす。□	B		近隣の施設にポスターを貼ってもらったり、積極的に中学校の説明会に参加してPRしたりした。来年度は塾との連携を密にしていきたい。
国際教育	昨年度からの国際教育の取り組みを継続し、北稜ならではの国際が文化となるよう、国際教育をより進めていく。	国際交流、留学生の受け入れを継続し、日常から国際を感じられるようにする。また生徒中心に課題点を見つけ、よりよい交流が行えるようにする。	A	A	国際交流、留学生の受け入れを継続し、国際を感じられる取り組みを行うことができた。留学生の受入については留学生側にも日本で学ぶということを意識させていきたい。
		北稜ならではの留学プラン、ホームステイシステムの継続を行うとともに、様々な経験をした生徒が、校内での経験の発信や国際交流のリーダーとして活躍できるような環境を整える。	B		留学プランについては今年度も継続することができた。今後は留学に行く意義を参加生徒によく確認していきたい。ホームステイについては各家庭の受入に向けてのハードルが高く、今後は個別に希望をとるような形にしていきたい。
生徒支援部	発達支持的生徒指導の組織的展開	遅刻指導をリニューアルし、学年団と連携して生徒の内面に迫ることで円滑に、充実した学校生活が送れるようにする。地域に開かれた北稜祭をさらに発展させ、生徒の表現活動を支える。	B	B	遅刻指導は、完全にはやりきれなかったが、一部の生徒で登下校時に職員室で声掛けを行うことで、学校生活を前向きに送れるようになった。一般開放となり2年目の北稜祭は、生徒の主体的な取り組みが定着してきた。さらに発展させるために北稜CANVASと連携したり、より生徒が主体となった表現ができるような取り組みにしたい。
	特別支援教育の充実	より効果的な支援や指導ができるように、特別支援コーディネーターを核とした組織再編を行い、迅速に支援が必要な生徒にアプローチする。	B		運用面では合理的配慮や関係各所への相談を行うことで支援につなげた。より組織的な対応にするために、組織体制を再構築していく必要がある。
進路指導部	「自律的・主体的な学び」を目指した進路指導の体系を構築する。	解法の理解にこだわった講義を行ったり、チームで協働的に学習に取り組むことができる環境を整ったりすることで、学習の習慣化を図り、校内の学習リーダーの育成をする。	B	B	(成果)志を同じくする者が集う場を作ることで、学習への動機づけや学習習慣の定着、学力向上に向けての具体的な行動において一定の効果をあげることができている。 (課題)「モチベーションの維持」が課題。2学期以降に授業への参加率が下がってきてしまう。声掛けも必要と思うが、「自主的・自律的学習」と「教員からの働きかけ」のバランスを見極めていく必要がある。
		各学年での進路学習の様子や模試の申し込み、進路希望調査などの進路情報をスタディサプリ等を利用して積極的に発信することで、生徒・保護者に進路について考えたり、コミュニケーションをとったりすることを促す。	B		(成果)進路学習等の情報をスタサブを通じて迅速に保護者に情報共有し、家庭での進路に関わる話題作りを行っている。 (課題)外部の模試の受験や共通テストの受験など、ハードルの高いものへチャレンジする生徒がなかなか出てこない。生徒がより幅広い進路選択をできるように、その必要性等についてさらに情報発信、学年と粘り強い指導を続けるための連携を強化していく必要がある。

評価領域 (分掌領域)	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			項目	総合	
図書部	「読書活動」や様々な情報発信により「自立した学習者」が育つサポートを行うとともに「生徒の居場所」となれる魅力ある図書館づくりをめざす。	学年・教科と連携しながら、ニーズにあった情報(紙ベース、デジタル資料)を提供するように努めるとともに計画的に生徒の読書習慣定着にむけた取り組みを行う。	B	B	探究学習を中心に、司書を通じて基本的な情報収集(調べ学習の基本から)のガイダンスを行った。また読書の時間は単に読ませるだけではなく「ワタシの一行」をピックアップさせ表現させる取り組みを行った。
		図書委員会を中心に「読書」の楽しさ・大切さをイベントだけではなく日常の活動を通じて全校生徒に還元させ、「居場所」としての図書館の魅力を発信する。	B		図書委員の企画展示や広報紙の発行などにより「読書」への関心を高める日常の取り組みの他、12月に図書館フェスティバル(びぶりおみくじ・ビンゴゲームなど)を実施し入館者増に努めた。
事務部	生徒が学習や部活動等に主体性を発揮しながら挑戦できるような学校機能の充実に貢献する。	老朽化した施設設備の改修等を持続的かつ計画的に実施することにより、生徒が過ごしやすい場を作るとともに、引き続き予算の効率的な執行と経費節減を心がけ、教育活動のさらなる充実に向けて、他の分掌や教科と連携を密にししながら効果的な予算執行を行う。	A	A	今年度は体育館のWi-Fi整備をはじめ、特別教室のエアコン整備や教室照明のLED化など、生徒の学習環境の改善に取り組んだ。次年度以降も引き続き、効果的な予算執行に努め、さらなる教育環境の充実に努めたい。
第1学年部	「国際」「環境」「表現」の3つの教育の柱の下、主体的・自律的に行動し、様々なことに挑戦する生徒を育成する。	・高校生活にできるだけ早く適応し、様々な教育活動に積極的に挑戦できる環境を整えるために、各担任が生徒一人一人を支援する。	B	B	日常的に生徒指導が必要な生徒に対し、関係分掌と連携して粘り強く生徒指導を行った。例年よりも生徒指導の件数が多く、今後も繰り返し指導が必要である。
		・国際交流委員、環境委員、北稜祭実行委員会を中心に教育の柱となる活動を生徒主体でクラス一丸となって企画・実行・振り返りができるよう支援する。	B		いずれの委員会も、高校生活で初めての活動を、自分たちなりに企画し実行できていた。振り返りを行い、今年行った活動を次年度に引き継ぐはたらきかけが大切である。
		・生徒自身が、3年後の進路や希望の職業を想定して文理選択やコース選択を行えるよう、分掌や教科と連携した進路指導を行う。	B		教務や進路、教科と連携した進路指導を進めた。教科担当と連携して成績不振を抱える生徒の支援を行った。スタサブや模試を活用した学力伸長にも取り組んだ。
第2学年部	国際交流に取り組み、表現力・コミュニケーション力・国際感覚を養い、主体的・自律的に行動する生徒を育成する。	本校実施の国際交流において、国際交流委員の生徒を中心に様々な企画・運営を行い、日々培った英語で「おもてなし」を行う。	A	A	本校での国際交流では、日本の文化や遊びを含め、さまざまな企画を計画し、他国の生徒と楽しく交流する、学びの多い学校行事となった。
		オーストラリア研修旅行を通して、多様な文化や習慣を肌で感じ、生きた英語に触れ、主体的・自律的に行動し、自己表現ができる生徒を育成する。	A		オーストラリア研修旅行ではホームステイや現地高校生との交流をし、体験を通して多様な文化に触れることができた。生徒が主体的に取り組み、満足度の高い事業となった。
第3学年部	学校行事に主体的に取り組み、試行錯誤することで思考力・判断力・表現力を伸ばし、国際感覚を養う。その経験や力をいかして希望進路実現をさせる。	遠足・北稜祭・国際交流事業に向けて各種委員会を開催し、生徒が主体的に取り組める雰囲気づくりを心がける。また、失敗も経験しながら、挑戦、成長していける環境を整える。	A	A	全ての学校行事において各種委員会を中心に主体的に取り組むことができた。行事に対して生徒間で協力し合いながら取り組めたが、生徒のモラルや規範意識の低さは課題として残った。
		春の面談から生徒の目標を把握し、自発的な進路研究を促していく。進路指導部とも密に連携し、適切な時期に適切な進路情報を生徒だけでなく保護者にも提供する。	A		夏季や状況に応じて個人面談を行い、生徒の目標を確認し、助言をおこない、個々生徒の進路実現を目指した。保護者とも連携をはかり生徒の進路保障に力をいれた。
学校関係者評価委員会による評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校評価アンケートの多くの項目で学校満足度の評価が高い。学校の取組の方向性がうまくいっていると考えられる。</li> <li>・探究活動の取組が、生徒の主体性・協働性・社会性・探究性の向上につながっており、今後さらに推進していくことを期待する。</li> <li>・海外研修旅行の行き先が変更になったが、本校の教育目標に照らして今後も海外研修旅行は続けてほしい。</li> <li>・地域性の強い都市部の高校として、地域と連携しながら探究活動を行うことで学校が地域のプラットフォームとなることが期待できる。</li> </ul>				
次年度に向けた改善の方向性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すべての教育活動において、生徒の主体性の伸長を図るとともに、生徒の成長度合いを検証していく。</li> <li>・多様な生徒に対して、特別支援教育の充実や発達支持的生徒指導を継続して行う。</li> <li>・本校の魅力を伝える情報発信、特にSNSによる情報の発信を増やすとともにより発信内容を充実させる。</li> <li>・多様な進路に対して、適切な進路情報の提供とともに個別最適な進路指導の充実に努める。</li> </ul>				